

News
letter

噴火灣文化

【Funkawan Culture】

2014. 3 Vol. 8



Date City Institute of Funkawan Culture

伊達市噴火灣文化研究所

■インタビュー「*Fieldworker*」

- 【映画】「野田弘志氏・日向寺監督・清水カメラマン鼎談」
映画監督 日向寺 太郎…………… 3

■教育実践

- 【自然】「長流川の野鳥を題材とした環境教育の実践」
～地域の自然(野鳥編)出前講座の実施報告～
伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 羽馬 千恵…………… 8

■実践報告

- 【自然】「伊達市大滝区におけるヒグマの実態と行政との連携について」
自然保護監視員・鳥獣保護員 橋本 強志……………11

■自然環境

- 【伊達市街】伊達の自然「植物を中心に」
NPO法人 森・水・人ネット代表理事 木村 益巳……………13

■文化財

- 【保存】「蝦夷三官寺善光寺関係資料の修復事業が生み出したもの」
伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 伊達 元成……………15

■シリーズ「*Folklore*－伊達の民俗－」

- 伊達市市民生活文化伝承者 木地師(きじし) 府川 晃氏……………16

表 紙

野田弘志「TOKIJIKU(非時)X Skeleton」

Timeless X:Skeletons 1992

[145.5×112.1 油彩]

〔(財)蘭島文化振興財団 蘭島閣美術館蔵〕



「野田弘志氏 日向寺監督・清水カメラマン鼎談」

2013年9月30日、日向寺太郎監督による野田弘志画伯のドキュメンタリー映画『魂のリアリズム 画家野田弘志』のクランクアップを記念して、『爆心 長崎の空』をだて歴史の杜カルチャーセンターで上映しました。上映前に先立ち、日向寺監督と清水カメラマン、野田弘志画伯による鼎談が行われました。この鼎談では、日向寺監督も野田画伯も「美とはなにか？」のテーマについて絵と映像でそれぞれ追求していて、通底する精神は同じであることをお話されました。



司会 永山優子

新世代を代表する正統派写真実画家。だて噴火湾アートビレッジアートディレクターとして絵画教室「野田・永山塾」で画家の育成の指導にあたっている。



画家 野田弘志

現代日本を代表する写真実画家。だて噴火湾アートビレッジ芸術監督。主な作品に《TOKIJIKU(非時)》シリーズや《蒼天》など。



映画監督 日向寺太郎

仙台市出身。2005年「誰がために」で監督デビュー。「火垂るの墓」に続き「爆心 長崎の空」は監督として3作目となる。



カメラマン 清水良雄

東京都出身。撮影として関わった作品に「老人と海」「絵の中のぼくの村」がある。日本映画撮影監督協会理事。

永山：——日向寺監督と清水さん、野田先生のドキュメンタリー映画の撮影が終了したと伺いまして、まずはお疲れ様でした。

去年の5月から撮影が始まったとご紹介ありましたが、撮りためた映像の編集をこれから作品としてまとめ上げていく作業が残っていますね。

録り残しっていうのはないんですか？

日向寺：今日先程、つい2時間前くらいでしょうか、撮影が終わったばかりなんですね。

永山：——もうそれで撮らなくてはいけないシーンはないんですか？

日向時：はい。一応ない予定です。

永山：——50時間にも及ぶ様々なシーンが撮りたまったということでしたけど、せっかく撮ったものをほとんどカットするそうですね。

日向時：その通りです。この映画が90分になるか、まあ120分を超えることはないと思うんですけど、90分とした場合に、他のシーンのほとんどは使わないということですね。

永山：——50時間引く120分はカットということで、私が登場するシーンはないんだろうなあと思ったんですが(笑)、沢山の要素を取り込んで取材して、そこからいらないものを削っていく行程が待っている訳ですね。野田先生、先生は絵画を創るというお仕事の中で、多くの取材をしてそこからいらないものを削っていくということはあるんですか？

野田：僕の仕事は、とにかく「いらないもの」をいかに削ぎ落とすか、「いるもの」だけにすることですから、同じですね。

永山：——50時間以上、先生は傍らでずっと取材をされながらご制作されていて、それが終わってしまった。監視されることがなくなるんですけど、さみしいですか？

それともせいせいしたという感じですかね。

野田：まあ、ほっとしたと。

永山：——長い時間ご一緒にいて、お二人が居てよかったなと思うことは何かありますか？

私はですね、お二人と知り合えたことで、人生経験も豊富で物作りをしておられる方ですから、いろんな経験談を聞いたり、おすすしたい映画を教えて頂いて、そういうのを観たことによって、とっても自分の制作にも生きるような情報を得ることができたなあと思ってます。

先生は、お二人と一緒に過ごされていて、お二人と一緒にだったから良かったなと思ったことは何かありますか？

野田：仕事が僕の場合ハードですから、ちょっと休憩をする時に監督や清水さんと雑談するんですけど、結構二人とも真面目なんですよ。

僕も真面目ですから。芸術の話になっちゃうんですね。今日もドストエフスキーの話ができました。「人生で一番大事なものは美である」とドストエフスキーが「悪霊」の台詞の中で言わせているんですね。監督はもの凄く本を読んでいますからね、

僕は色々聞いて勉強するんですけどね。人生最も大事なものが美である、その美を映画という方法で追求している。「美とはなんぞや」という問題があるんですけど、僕は絵で追求している。清水さんは映像で追求している訳ですね。

だから、共通の通底する精神は同じだなあと実感しました。

永山：——沢山取材をして、いらないものをどんどん削ぎ落として、自分たちの美というものを形にしていって仕事をするということについて、この前撮影現場を見学された方とお話しする機会がありました。撮影している間、野田先生がじいーっと見つめて描いておられる所を、お二人もじいーっと、監督は映画を作る目で見ていますし、清水さんはファイナダーを通して見ている、みんな無言でしーんと静まりかえっている。長い時間を凄い集中力で時間が過ぎていったそうで、びっくりしました。演出で「ああしてください、こうして下さい」といった指示はほとんどないそうですね。そういうことをお聞きしまして、私もドキュメンタリー映画の作り方、行程というのは、先程野田先生がおっしゃったように通底するところが写実画をすることと似ている気がしました。つまり相手がありますよね。撮りたいモデルだとか、描きたい物だとか。そういう物を見る通りというよりも、自分たちで「見た」ことを描くところに、私は共通点を感じています。

写実画ってというのは、そっくりにするために見たことを全部描くという「見る」ことへの意識がありますが、本当は「見る」という主体的な視線が凄く大事なんです。それで形が作られる仕事なんですけど、そういうことを考えたときに、改めて御三方それぞれにお伺いしたいと思います。監督と清水さんは先生を撮ることがお仕事でしたし、その間野田先生は自分のお仕事をされていました。それぞれに、同じ時間でもって取り組んでいた仕事がある訳です。その時に、制作を通して相手に「何を見た」、その美というところをもう少し聞きたいんですね。「何を見た」を思いますか？

日向時：まだ、これから編集に入中で発見することがいっぱいあるんですけど、非常にシンプルに言いますと絵を描くことは過酷だと思いました。

こんなに大変な作業かと。勿論、いままで描かれていた絵を拝見しまして想像はつきましたが、ここまで大変な世界かって思いました。

永山：——監督のお仕事も過酷ではないですか？

日向寺：自分でやっていることは、あまり過酷ではないと思います。

永山：——野田先生は、ご自身で自分の仕事は過酷だと思いますか？

野田：思ってますよ。

永山：——清水さんはどうですか？

清水：撮影者というのは、肉体労働というところが大きくあるので、撮影しているときは芸術だとは思っているわけではないのですが、「これは使わないだろう」

と思って50時間撮っている訳ではなく、全部OKだと思っているのにほとんど切られてしまう。撮ったものを見たときまでは、その映像は私のものなんですけど、撮り終わって監督に渡した時に監督のものになってしまう。

だから、これは残して欲しいというのはあるんですけど、職業柄しょうがないかなと。先生を撮るのはどうしたらいいのか、当初色々考えたんですけど、「リアリズム絵画を描くっていう人をリアリズムで撮る」と考えました。徹底的に画家の描く姿を記録すればそれで映画になるかも知れないって思ったのが、開き直っているんですけど、そう思ってた撮ってました。

永山：——監督は、清水さんが撮影されてる映像はモニターなどで見てみないと、どうなっているかその場では分からないわけですか？

日向寺：分かりません。

永山：——だけど俺のものと感じはしますか？それともやっぱり、それは清水さんという一人の芸術家のものだという意識はありますか？

日向寺：清水さんと仕事するのは今回が初めてなんですけど、昔から敬愛するカメラマンの一人だったので、最初にどういことが狙いかって事の根本さえ話し合っていれば、あとは逆に自由にして頂いた方が縛られないといいました。清水さんの発見が無くなってしまうと思うので、清水さんが自由に発見していただく中で、僕も気づいたことがあれば、これは撮っておいて欲しいとお願いすることもあるんです。



永山：——清水さんが発見したことを、日向寺太郎作品というわけですね。

清水：映画ってそういうものなんですよ。

日向寺：非常に失礼な例えを野田先生に承知の上で非常に分かりやすく表現すると、野田先生が魚だとすると、魚を釣るのは清水さんなんですよ。釣った後それを塩焼きにするのか、刺身にするのか、フライにするのかってのが僕の役目でもあるんです。清水さんはそこを兼ねているところも、もちろんあるんですけど。

永山：——下準備くらいは、やっておくんですね。

清水：そうですね。これは塩焼きにした方が良いでしょう。刺身にしかないように釣るとかね。

永山：——野田先生は撮影されながら、今回ご制作されていた作品があるわけですが、これに対してどんなものを、どんなことを見ておられたのか。何のモチーフを描いていたかは言った方がいいのか、良くないのか私は分からないので、あくまでも新作ということではおきますけど。新しい作品を描いていく中で、どんな美を見つけたのでしょうか？

野田：だいたい決まっているわけですよ。前提に「死」というのがあって、死すべき人間が何を考え、どう生きて何を表すべきかという。今日、監督とそういう話をしたんですが、やっぱり通底する。完全に一緒だなと思ったんですね。監督もやはり出発点は「死」ですよ。3作とも後で振り返ると・・・何か言っていましたよね。

日向寺：私の映画に関してですね、映画はこれが3本目なんですけど、実は今回いろいろマスコミから取材

を受ける中で、3本振り返ってどうですか？って聞かれることもありまして、振り返ってみると、物語としては同じ形を描いているんです。

と言うのは、悲しみとか、苦しみとか受難とか、そういうところから立ち上がる人間しか描いてないんです3作とも。それに気づいて、全く意識していなかったもんですから、無意識の中で自分が人間に力があるというのは、何かから立ち上がろうとする人間を描きたいんだなあ、はっとしたんです。そのことを雑談でお話しました。

永山：——死すべき人間ですね。と野田先生が仰った時点で、「そうか、野田先生のことをもうすぐ死すべき人間と思って撮っているのかなあ」と、ちょっと心配しましたが、そういうことではないのですね。

日向時：そうです。そういうことではありません。

永山：——撮影にあたって、たびたび伊達市に逗留していらっしやいました。結構長く伊達市に住まわれて、そして野田先生のアトリエに足を運ばれていたの、街で見かけた事があるなあと思われた方もいらっしやるかもしれません。お二人はこれまでの滞在中で印象に残っていること、何かありますか？伊達市の街でもよいですし、人でもよいですし。自分たちが過ごしてきた時間の中で、「伊達でこんなことあったなあ」と印象に残っていることがあったら教えてください。

日向時：それは、延べにすると2ヶ月半位居たことになるんですね。山ほどお話したいことはあります。伊達の皆さんに、特に野田先生のお知り合いを中心として本当にお世話になり感謝申し上げたいんですけど、その方達が野田先生を見かけるのはいつも酔っ払っている時ばかりで、酔っ払っていない野田先生を見るのをとても楽しみにしているってことですか、あとは清水さんが話されるかもしれませんが、2月から3月にかけて一番長く居た時に、雪に車が閉じ込められてまして・・・そこから清水さんにバトンタッチします。(笑)

清水：東京で生まれたのですが、雪の中で車を運転する経験は無かったわけではないんです。実は、2月に伊達市内で猛吹雪に遭遇して、よくわからないまま雪に突っ込んでしまいました。監督が外に出ようって言うんだけど、この会場に來ているある方が助けてくれたんです。だけどその時、このままどうにかなっちゃうとは思わなかったですね。



NHK「日曜美術館」で紹介された野田画伯の絵画に打ち込む姿勢に強く心を打たれ、ドキュメンタリー映画の制作を企画した。撮影は2012年5月から開始。「聖なるもの」シリーズの一つである「鳥の巣」の制作を50時間以上にわたり追いかけた。

永山：——あまりにも経験したことがない体験だったということですよ。

清水：具体的に「危ない」という気にならない。前もセスナでエンジンが止まったことがあるんです。急に静かになって「何かな？」って思ったら、パイロットが「掴まっててください」って。でも撮影用に座席全部外して掴まるところが無いんですけど、その時もこれで死ぬとは思いませんでした。

永山：——本当に危なかったのかもしれないですね。

清水：交通事故で死ぬと思われて、飛行機は止まる、韓国で車がバーストして危ないことがあって、3回は死に損なったんですけど。

永山：——カメラマンっていう仕事はそんなに大変な仕事、いつも命がけっていうことですよ。

清水：そういうことになりますね。

永山：——いろんな体験をされて、楽しかった記憶もあったのではないですか？

清水：美味しい物を沢山いただいたので、伊達の口ケに行くとなると、「ああ、また美味しい物がたべられるな」と思います。

永山：——伊達の味という記憶もあるわけですね。

そういうことを、沢山ご経験されると、野田先生の撮影は終わりますけど、ちょっと撮ってみたい人とか、あったりしますか？

清水：まだ、2時間前に終わったばかりなので、何となく「終わってしまった」悲しみってのは、いつ

もありますね。

だけど、映画っていうものは、いつか終わるものなのです。やな仕事でも「やだな」って思っても終わり、「いいな」って思っても映画ってのは終わるものですから、そこで、飛ぶ鳥跡を濁さず失礼な事をしないで、静かに消えてくつのが・・・。

永山：—— なんととも言えない魅力ですね。

清水：通り過ぎてく感じです。

永山：—— 通り過ぎずに、また野田先生のドキュメンタリー映画が出来上がった暁には錦を飾るというか、帰ってきていただきたいと思います。

清水：ぜひよろしくお願いします。

永山：—— 監督も清水さんのもこの街に対して、とてもいい印象をお持ちだということで、今日は伊達市民の方がお集まりだと思うんですけど、伊達市民の方、どのくらいいらしてますか？

壇上から見る限りでは、結構市外からいらしている方も多いいみたいです。ありがとうございます。

永山：—— 伊達市には、映画館がありませんので、映画鑑賞はしばらくぶりという方もいらっしゃるかもしれません。一方で映画が大好きで、今日も観にきましたという方も沢山いらっしゃると思います。道内では最も早く「爆心」が上映されることになったんですか？

日向：2番目です。

永山：—— 最初はどちらだったんですか？

日向：新ひだか町です。

永山：—— ふるさと親善大使をなさっているそうですね。

日向：私の親の故郷なんです。

永山：—— 是非ともドキュメンタリー映画は一番目にと意気込みますけど、今日たくさんお集まりいただいている方に、これから上映されます「爆心 長崎の空」について、監督から、ご紹介などいただけたらと思います。

日向：本当に今日は、たくさんお集まりいただいてありがとうございます。

内容については、これから観ていただくので、お話しないうもりなんです。

どういう風にして、この映画を作ろうと思ったかってことだけを簡単にお話したいと思います。

非常に簡単に言いますと、長崎という街にとっても魅了されたんです。坂だらけの街で、地形が特別だということ。

キリスト教に関係が深いということ。港町なので、いろんな文化が混じっているんですね。

まさにチャンポン、長崎の名物がありますが、チャンポンは混ぜ込めですからね。

もう一つはやはり被爆地であること。それいろんな事がミックスされて、それは長崎固有な土地の記憶ではあるんですけど、ここで描いたことは、その土地の固有の記憶というのが枝葉だとすれば、それを切り払った幹というのは多分どの土地であっても普遍的なものだと思ってるんです。

私は東北で生まれ育ったこともあって、ある意味ではこれはアフター3.11(東日本大震災)の映画だと意識して作りました。

永山：—— 今、たくさんのキーワードが出てきましたけど、それがアフター3.11に繋がるんですね。

日向：はい。

永山：—— 今日の思い出と共に来年、ドキュメンタリー映画を、御三方それから今日いらしている皆さんと一緒に鑑賞できたらいいと思います。今日はありがとうございました。

【展覧会情報】



存在の美学

第三回 伊達市噴火湾文化研究所同人展

伊達市噴火湾文化研究所同人展
永山 優子 野田 弘志 廣戸 絵美

招待作家
今村 圭吾 小尾 修 松永 翔子 松村 卓志
森永 昌司 李 殿剛 渡辺 亮

札幌展のみ招待作家
青木 敏郎 石黒 賢一郎 磯江 毅
大堀 修治 五味 文彦
沢田 光春 水野 峻 芳川 誠

野田弘志「爆心」のTシャツ(部分)

第三回 伊達市噴火湾文化研究所同人展

—伊達展—

2014 NPO法人伊達メセナ協会 創立20周年記念事業
5月18日(日) — 6月3日(火)
■開館時間/10:00~19:00
【会場】だて歴史の杜カルチャーセンター
伊達市熱々枝町34-1 TEL.0142-22-1515

●ギャラリートーク 5月18日(日) 15:00~

観覧無料

《野田弘志ドキュメンタリー映画上映会》
6月1日(日) ■だて歴史の杜カルチャーセンター(大ホール)
●15:00~16:30 「爆心」のリアルな映像を上映
●16:30~17:00 座談会(野田弘志・日守孝太郎・青木敏郎・森永昌司・李殿剛・渡辺亮)
※16:30~17:00 座談会(野田弘志・日守孝太郎・青木敏郎・森永昌司・李殿剛・渡辺亮)
※17:00~17:30 座談会(野田弘志・日守孝太郎・青木敏郎・森永昌司・李殿剛・渡辺亮)

第三回 伊達市噴火湾文化研究所同人展+9

—札幌展—

2014
6月21日(土) — 7月6日(日)
■開館時間/9:45~17:30 (入場は17:00まで)
【会場】札幌芸術の森美術館 【会期中無休】
札幌市南区芸術の森2丁目75 TEL.011-591-0090

●ギャラリートーク 6月21日(土) 15:00~
29日(日) 14:00~

観覧料 (野田弘志・永山優子)
一般 1,000円(800円)
高校・大学 600円(400円)
小・中学生 400円(200円)
※(1)内は前売料、また20人以上の団体観覧料金
※(2)前売料の請求は(1)の9割
道新プレイガイド・大丸プレイガイド
札幌芸術の森美術館

《野田弘志・永山優子》
美学対談
2014 6月11日(水)
時間/12:45~13:45
会場/道新プレイガイド・BOX
【入場無料】
●札幌市中央図書館3F



長流川の野鳥を題材とした環境教育の実践 ～地域の自然(野鳥編)出前講座の実施報告～

伊達市噴火湾文化研究所 学芸員 羽馬千恵

1.はじめに

長流川は、美笛峠近辺に源を発し、伊達市大滝区と壮瞥町を経て伊達市の長和地区の河口で噴火湾にそそぐ内浦湾最大の河川です。日本野鳥の会室蘭支部長の篠原盛雄氏によると、長流川では、これまでに約250種の野鳥が確認されており、種数においては苫小牧市のウトナイ湖に匹敵する西胆振最大の野鳥の生息地とされています(北海道新聞, 2013/11/3)。

本稿では、地域にとって身近な存在の長流川に生息する野鳥を題材として行った出前講座の様子と授業の実施による児童たちの変容を報告したいと思います。

2.実施方法

伊達市立関内小学校5・6年生11名の児童を対象に平成25年10月29日に実施しました。1時間目は教室で事前学習をし、2時間目に長流川河口へ移動して野外観察を行いました。

開催時期を10月下旬としたのは、野外観察に馴染みのない児童にとって観察が容易と思われる大型で比較的動きの少ない水鳥を観察対象とするためです。カモやガンなどの水鳥は、主に冬鳥として9月下旬頃から翌春までの間、シベリアなどの北方から越冬のために日本に渡来してきます。

本講座のねらいは、児童たちに地域の自然の多様性について、長流川の野鳥を通して認識してもらうことでした。しかしながら、生物多様性といった難しい用語やマニアックな野鳥の名前の使用は極力避け、児童でも知っているスズメやカラスなどの身近な野鳥を題材に用いて、地域の生物多様性を認識してもらうよう努めました。

3.教室での事前学習

事前学習の内容は、①長流川の多様な野鳥について、②野鳥の渡りについて、③天然記念物について、④野鳥の仮剥製の観察の4部構成で行いました。また、講師が一方向的に話すのではなく、発問形式の授業としました。以下に授業の様子を一部紹介したいと思います。

講師「今日は、長流川に生息する野鳥について学習します。まず、身近にいて、みんなが知っている野鳥の名前でもいいし、長流川にいるだろうな～と思う野鳥の名前を挙げてみて下さい」

——児童から、スズメ、カラス、ハト、ハクチョウ、オオワシ、ウミネコ、カモメ、カモ、ツバメの9種の回答が出る。

講師「では、みんなが挙げてくれた鳥の中で、例えば、スズメ。伊達にいるスズメは、1種類じゃないって知ってる？」

児童「え?! 知らないよ」

——スズメとニューナイスズメについてマグネットを用いて説明。

講師「じゃあ、次はカラス。カラスも伊達に何種類かいるんだけど、この2種類のカラスは、何が違うかな? (2種類のカラスのマグネットを黒板に貼る)」

児童「あ! 嘴の大きさが違う!」

——ハシブトガラスとハシボソガラスの説明をする。また、その他にもカラスがいることを説明。

講師「じゃあ、次。みんなは、ハクチョウが飛んでいるのを見たことある？」

児童「ある! (ほぼ全員)」

講師「長流川にやってくるハクチョウも実は1種類じゃないんだよ」

——オオハクチョウとコハクチョウについて説明。また、外来種コブハクチョウが身近に生息していることを補足的に説明。



写真1 野鳥についてマグネットを用いて解説

講師「では、次は、カモメ。長流川にカモメは何種類いるのでしょうか？」

児童「3種類くらい?」「4種類!」

講師「正解は、主に8種類」

児童「8種類!？」

講師「でも、いつも8種類のカモメがいるわけじゃ

ないんだ」

——カモメの種類の説明に加えて、鳥の渡り（夏鳥・冬鳥）について説明し、季節によって渡去したり、渡来したりする種がいることを説明。

講師「ここまで、色んな種類がいることを説明したけど、長流川の凄いところは、他にもあります。（オオワシ、オジロワシのマグネットを貼る）。このワシたちの凄いところは何でしょう？他の鳥との大きな違いは何か、分かるかな？」

児童「大きい！」

講師「確かにワシは大きいね。でも、もっと凄いところがあるよ。ヒントは、タンチョウという鳥やマリモなど、数が少なかったり、限られた地域にしかない生き物を国の法律で守っているよね？…天然…？」

児童「分かった！天然記念物！」

——長流川がオオワシ、オジロワシなどの天然記念物の越冬地になっていることを説明し、その生態を踏まえて、なぜ長流川に渡来するのかを説明。また、講師が作製した翼長2750mmにもなるオオワシの実物大模型を見せて、大きさを実感させる。

※（授業より一部抜粋）

以上の様子で授業の解説を終えた後、実物の標本を児童たちに見てもらい、希望者には触れてもらいました（写真2）。使用した標本の多くは、市民から当研究所に寄贈された剥製や、昨年度に実施した動物の標本を作る市民向けワークショップの実施以降に、市民から研究所に持ち込まれた野鳥の死体を仮剥製にしたものです。剥製または仮剥製の内容は、ハチクマ、ホオジロガモ、コウライキジ、エゾフクロウ、オオハム、ミヤマカケス、ハシブトガラス、アカエリヒレアシシギ、イカル、シジュウカラ、ゴジュウカラです。子どもたちには、エゾフクロウの仮剥製に触れたり、ハシブトガラスの羽を実際に持ってもらい、野鳥の羽の軽さを実感してもらいました。また、オオハム（アビ科の水鳥）の仮剥製は、首に釣り糸が絡まった状態で死亡していたのを筆者が長流川河口で拾取したものです。この個体は、仮剥製にしても釣り糸は取って



写真2 標本学習の様子

取らず、なぜこの鳥が死に至ったのか、観察者に分かる状態で残しました。

4.長流川河口で野外学習

車に児童を乗せ、教室から長流川河口へ向かいました。野外で野鳥を観察しやすいように、この時期に長流川河口で一般的に観察される種をあらかじめ想定し、野鳥の写真を載せたワークシートを1人1枚ずつ配布しました。

また、この時期、オオハクチョウは、日中は長流川を飛び立ち、田畑などで落ち穂を採餌しているため、まずは、長和町の田んぼでオオハクチョウ40羽を観察しました（写真3）。

その後、長流川河口へ移動し、主にカモやカモメの観察を行いました。野鳥に負荷を与えないために、



写真3 田んぼに飛来したオオハクチョウ（長和町の観察地点）

車は2台に限定しました。それでも大勢の人間が突然現れたせいか、カモが一斉に飛び立ってしまいました。しかしながら、カルガモ、マガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、ホオジロガモ、コガモ、アオサギ、オオセグロカモメ、ウミネコ、ウミウを観察することができました。

5.子どもたちの意識の変容

事前学習から野外学習まで、児童たちの反応は非常に良く、大変意欲的に授業に参加してくれました。

事前学習をしていたため、野外に出た児童たちは、カラスを見るたびに、何の種類のカラスであるか、一生懸命に見分ける様子を見せてくれました。

また、授業の実施後、自由記述形式のアンケートを実施しました。その結果、地域の自然に対する意識の変容が見られました（表1）。自分たちの周りには沢山の野鳥が暮らしていることに気づき、多様な自然環境が身近にあることを実感したという回答が多く見られました。

このことから、本講座のねらいであった地域の生物多様性について、事前授業で専門用語で説明せずとも、ほとんどの児童が自ずと認識できたことが分かりました。

今後の課題としては、多数で観察に行くと野鳥を飛ばしてしまうことが分かったため、野外学習については児童数の多い学校では実施が難しいこと、また、児童にとって遠方にあるカモの識別は少し難しいことなどが分かりました。



写真4 野外学習のようす

6. 伊達ならではの講座を

まとめでは、長流川や小学校周辺には、外来種が生息しており、野鳥などの在来生物への影響が心配されることを伝え講座を終わりとしました。

外来種問題も、地域の自然の保全も、ともに子どもたちへの教育なしには解決しない問題です。本市で発生している外来種問題、例えば、アライグマの問題

も、地域の中で子どもたちの教育に活かすことができれば、ただ駆除するだけでなく、格好の教材となり得ます。環境行政は市内の自然に関する情報を蓄積し、市民へフィードバックするところまで見据える必要があると思います。ここ数年、伊達地区だけでも、農作物被害が発生し、毎年100頭前後のアライグマが駆除されていることは、市民にもあまり知られていない事実です。

身近に豊かな自然がある伊達だからこそできる自然を活かした出前講座は、様々なものを題材にすることができるため、講座のタイトルを「地域の自然（野鳥編）」としました。今後は、「外来種編」なども考案し、様々な自然教室を実施していく必要があるでしょう。

【謝辞】

出前授業を実施させて頂きました、伊達市立関内小学校の校長先生および担当教職員の方に深く感謝いたします。また、日本野鳥の会室蘭支部長の篠原盛雄氏には、本教室を実施するにあたって貴重なご意見を頂きました。また、千歳科学技術大学学生支援センター学生相談室の飯塚淳市氏には、野鳥の仮剥製を、NPO法人地域自然活動センター森・水・人ネット代表の木村益巳氏には双眼鏡を借用させて頂きました。この場をお借りして、お礼とさせていただきます。

【参考文献】

北海道新聞 2013年11月3日

アンケートの内容

- 野鳥の種類がたくさんあることがわかった。
- 伊達の野鳥は北海道の中でも多いことがわかった。
- 鳥は苦手だけどかんさつしてみてくわしくわかった。
- 色々な野鳥の名前や特ちょうが分かりました。
- かんさつに行ってもっと自分でも見てみたいと思いました。
- カモや白鳥、いつも見ているカラスやスズメにもたくさんの種類があっておどろきました。
- 今度はオオワシを見てみたいと思いました。
- 野鳥にさわってフワフワですごいなあとと思いました。
- 今日の授業で、いろいろな野鳥の見分け方がわかった。
- 下校中などで、鳥の鳴き声でどんな野鳥が分かるようにしたい。
- 長流川には約250種類の野鳥がいることと、それほど自然が豊かな場所ということがわかった。
- 長流川には250種類もいるということが一番びっくりしました。
- 冬になったら、オオワシを見たいと思います。
- 身近にいるカラス、スズメにも一つじゃなくてたくさんの種類がいるんだとわかりました。
- 本当に外に行ったらカモやカモメ、ウミウなどのたくさんの鳥が見えました。
- こんどまた見に行ってみたいです。
- 野鳥のことがよくわかったし、じっさいに見て身近にいる鳥とかも種類がたくさんあることがわかりました。
- 「自分でも調べてみたいな・・・。」と思いました。
- カラスやスズメの種類がいっぱいいることを知れた。

表1 児童のアンケート

- ふだん、何も考えずにカモやカモメを見るけど、今日の授業で鳥のとくちょうを知れて、これから鳥を見たら観察して鳥に関する知識を増やしていきたい。
- 長流川にいる野鳥の種類もわかったし、250種もいることがよくわかりました。本当ににている野鳥もいてみわけるのが大変だと思ったけど、みわけのポイントがわかって、みわけの事ができました。白鳥のオオハクチョウとコハクチョウのみわけが大変でした。
- 長流川には250種もの野鳥がいることがびっくりした。
- オオワシなどの大きい鳥もいるのにもびっくりした。最後に大きい鳥を見れた。
- 色々な鳥を観察できた。家からすぐ行けるので、今度行ってみたいです。
- たくさんの野鳥がいることがわかりました。カモだけでも、こんなにたくさんいたのがびっくりしました。
- 白鳥のコハクチョウとオオハクチョウの見分け方も分かって、これからハクチョウを見たら、見分けてみたいと思いました。
- アライグマの足あとも人間と少しにていることが分かりました。
- 外来種は、もともと日本にいない生き物だとわかった。
- 色々な鳥の名前がわかった。
- もし鳥を見るきかいがあったら、そうがんきょうで鳥の名前をしっかりとくにんしたいです。
- 鳥は、夏鳥、冬鳥がいる事がわかった。
- カラスだけでも色々な種類がいることが分かりました。
- カラスやフクロウのはくせいをさわってみて、カラスの羽はすごくかなくてフクロウはすごくきもち良かったです。そして、色々な鳥の名前も分かったので楽しかった。



実践報告
【自然】

伊達市大滝区におけるヒグマの実態と行政との連携について

自然保護監視員・鳥獣保護員 橋本 強 志 氏

私は昭和24年1月26日、羊蹄山の東に位置する京極町川西で生まれました。先祖は九州、熊本県の出身で、明治20年に新琴似に屯田兵として入植し、私は北海道で橋本家五代目となります。

私が現在の大滝区（旧大滝村）に来たのが昭和26年4月、2才3ヶ月の時であります。私の父、そして私の祖父も狩猟を行っており、私は幼少の頃から夏は畑仕事、冬は山仕事と狩猟を行う父の元で育てられてきました。私が銃の必要性を感じ始めたのは小学2年生位の頃からだと思います。

当時、大滝の農家では各家々で数頭の緬羊を飼っておりまして。寒い北海道で足先から頭まで暖かい毛糸で身を守るためです。ところが、この羊が大滝からいなくなってしまいました。毎年のようにヒグマに襲われてしまったのです。ある家では畑で、またある家では羊小屋から半死の羊が喘ぎ苦しみながら食われ去られる。私の家の羊2頭も一晩で襲われてしまいました。この頃から熊に対して銃を持つと決めていたように思います。その後も、熊による家畜被害が無くなることはありませんでした。ある年は牛が、ある年は馬がと続いたのです。

その頃大滝の円山地区では栗林関太郎氏、本郷地区では佐々木文雄氏、橋本庄八（私の父）と熊撃ち名手がいきましたが、撃ち取れば次の熊がまた現れるという繰り返しでした。また、被害も畑ではとうきび、燕麦、蕎麦、家畜では主に牛が大きな被害を受けていました。

中でも昭和44年9月清陵地区で酪農を営む板狩弘治氏の牛が殺され続け、同地の竹原芳久氏の牛舎兼自宅に熊が夜間入り、繋がれている牛を次々と殺傷し5頭の成牛が被害を受け、酪農で生計を立てていた竹原さんは熊の仕業になすすべもなく、この世の地獄を見ているようであったと大きく肩を落とす姿が今でも思い出されます。また、この熊は次年の4月、私の父が豊平川源流部で倒し、この熊による牛への被害はなくなりましたが、後も愛知地区で自宅すぐ横に繋がれていた山羊が殺され、また最近では、清陵地区の牧場で保管されているラッピングされた大きな牧草ロールが50巻程、熊に食いやぶられる被害が続きました。

熊の数々の仕業を目の当たりにした私は、父と同じく熊撃ちの道を進み始めました。

私は中学の頃から父について熊撃ちの方法や熊の行動等数え切れないくらい色々なことを学びました。そのことは今も私の中に多く残されています。春熊駆除



写真1 ヒグマにやぶられた牧草ロール

の山の中での2～3泊野宿。また、夜の山歩き、深い霧の中を地形図と方位磁石を使い歩き、まだ車等があまりない時代でしたので、早朝5時頃家を出て、帰りは夜の8時～9時頃になることもあり、1日で、30Km～40Km位の山歩きです。

エゾヒグマは非常に知能に優れ恐ろしい力とスピードを持ち備えた動物です。また、食性も羊を食べる時は次々に羊を襲い、牛を食べる時は次々に牛を襲う。草木についても山ウドを食べる時はウドばかり、フキを食べる時は続けてフキを食べ、また秋には山ブドウ、コクワ、ドングリ、オニグルミを食べる時も同じような食べ方をします。また、4月頃の残雪時には、雪の少ない川の中を歩き、危険を察知すると2～3mもある残雪の壁を垂直に飛び上がります。また、残雪時急斜面に起こる全層雪崩の地響きに驚き走り去ることもあり、その場に戻り事の様子を確かめることもあります。春穴から出て大きく移動する際に目的地近くにある山頂に登り、頂でぐるぐる廻り自分が来た方角を確かめるかのような行動もとります。おそらく冬にまた穴に戻る際のためと考えていますが、どのようにして記憶しているのか私にはわかりません。また、熊はあまり目は良くないと云われていますが、このような遠くを眺める行動、また、動く物に対する反応、秋の山々の色付きに対する熊の同化行動等を考えると、私たちに見る事が出来ない部分の何かが見えているのではないのかと思わされることもあります。それと併せて、熊が長い時間同じ場所に留まり、食べる、眠る際にとる行動に、その場所全体を数百メートルに渡り熊が地形を利用して巧妙に足跡を付けるのです。この行動を逆に考えると、熊は最初に自分の居場所を決め、次に

周囲の地形を見て、自分の足跡を残し、最後に行き戻しをして目的の場所に入るといった行動をとるのです。私はこの行動を熊の止め足と認識しています。父と共に、また、私自身でも数十頭の熊を倒してきましたが、倒すべくして倒したのではなく、たまたま山の神が私に熊を与えてくれた時のみ倒すことが出来たのだと思っています。

大滝地区でのヒグマの実態についてですが、春4月～冬12月末位迄の間に20頭位のヒグマが出入りをしています。ここ数十年、春熊駆除が行われずにきたことが、ヒグマが急増した要因と考えています。近年では大滝地区の方にも農作業での不安、身近にある里山の山菜も採りに行くことが出来ずにいるような状態です。ヒグマの数が増えたのに合わせ、里へ里へと人の生活の場に近づき過ぎているのです。



写真2 ヒグマの糞

平成25年12月迄に私なりに地域、足跡の大小等から調べたものを数にすると、成獣では雄が約6頭、雌が約3頭、また幼・若獣では雄が7頭、雌が約4頭となります。

この数を合わせますと大滝全域で約20頭のヒグマが出入りをしていると考えられます。

年間5頭～6頭の個体数調整を行い、5～6年後に5～6頭の数にすべきと考えますが、将来的には現状の共存ではなく、住み分けが必要不可欠と考えます。人々が生活する所。野生鳥獣の安住の場との線引きをする必要があると私は考えます。

大滝地区におけるヒグマの情報の住民への周知はヒグマを発見した方が駐在所、警察署、地元猟友会等に連絡をする場合や地区の方が大滝部会員に直接連絡をする場合、また、私たち部会員がヒグマを発見する場合等がありますが、いずれも伊達市また、大滝総合支所に連絡・報告をします。また、私たち部会員が伊達市、大滝総合支所から連絡を受けた場合は、ヒグマの状況等を私たち部会員と市環境衛生課とで協議し、必要に



写真3 ヒグマによってなぎ倒されたフキ

応じて現地に注意看板を立てたり、大滝ケーブルテレビで放送してもらいます。また、警察、消防等の連絡は、市環境衛生課の方で行っております。また、出沒が住宅地近くの場合は大滝総合支所職員、駐在所の所長が各家に注意を呼びかけて回ります。急の場合は私たち部会員が直接家を回る場合もあり、さらにヒグマ出沒期には逐次、私たちの方からケーブルテレビ局の方へヒグマ情報を伝えており、テレビ局から地区の方々へ情報が流れております。また、地区の方々からも、ヒグマの状況を教えて欲しいとの連絡を受け対応しております。自治体に求めることは、大滝区全域でのヒグマの必要頭数と現状の生息頭数を把握して、個体数調整を行うのが重要と考えております。そのためにも、地域で出来るだけ正確なヒグマの生息状況を調査し生息数報告を行うことの出来る人材が必要であり、また、この調査には非常に危険を伴うことから人材も限定されるのではと考えます。

このようなことから、私たち部会員もヒグマの情報を共有し、市役所へ必要に応じて情報の提供を行っております。また、色々なヒグマに対する情報の中にはヒグマが人に対して被害を及ぼす割合は1/1000とか1/2000とか数字で表されているのを目にしますが、私はこのようなことを数字で表すことが出来るものと複雑な気持ちで見いております。

なぜなら、私も自分なりにヒグマをこの地域で調べてきましたが、一番危険なヒグマは人を食う(襲う)ことを目的としているヒグマがいることです。そして同じように危険なのがヒグマが必要最大としているヒグマの進路を人間が塞いでしまうことだと思っています。

このような人間の行為がなされると人的被害は1/1000～1/2000という数字が大きく変わってことになるでしょう。人間が全く気づかない状態でヒグマの危険行動の中に入り込んでしまうことこそが一番危険なのだと考えます。今迄この地域では人的被害は発生していませんが、これからも行政と部会員が情報を共有して地域の安全と安心が図られるように努力していくことが大切であると考えます。



自然環境
【伊達市街】

伊達の自然「植物を中心に」

NPO法人 森・水・人ネット代表理事 木村 益巳氏

1.アヤメ川自然公園

この自然公園は出来て30年ほどがたつ。この川の改修が市民からの提案でストップし、自然公園として残された。事の経緯はこうだ。伊達高校横の小川は野草に詳しい松田寛先生のフィールドだった。そこへ連れて行ってもらった筆者は喜んで野草や野鳥を見ていた。ところが下流から河畔林の伐採が始まった。このままでは、自然の小川はコンクリート三面張りになり、続く河畔林の自然は失われてしまう。何とかならないかと、松田夫妻に相談した。夫人は「反対運動などしてもダメ、公園にしたらいい」と妙案を出してくれた。

それから松田先生と植生を調べ、この小川がどこまで続いているのかも調査した。嬉しい事に紋別川の取水口に水門があった。これで水害問題はクリアできた。次に大町の歯科の堅田先生に相談した。先生は、よし「おれがやってやる」と力を発揮してくれた。伊達市の「すぐやる課」などと話し合い、地元にも出向き説明、話は順調に進み、自然公園が出来上がった。言い出したのは筆者だったが、松田夫妻となにより堅田先生がいなければ自然は残せなかった。ここは今でも、小川と雑木林が続く自然豊かな公園である。市街地に近く利用も多い。小川のせせらぎを聞きながら、春は福寿草・キバナノアマナ・エゾエンゴサク・シロバナノエンレイソウ・ミズバショウやザゼンソウなど野の花をみたり、鳥の声をきいたり、エゾリスにも良く出会えるところでもある。新緑や紅葉の時季など四季を通じて楽しめるところだ。

2.開拓記念館と野草園

開拓記念館は明治の入植以降に、北海道に無い木が沢山植えられ大きく育っている。例えば、アカマツ・クロマツ・カヤ・コウヤマキ・カラタチ・ナツツバキ・サイカチ・カキ・スギ・メタセコイヤ・モウソウチクなどなどである。ほかに北海道にある種々の木も大木になっている。ここ開拓記念館は街の中には珍しく森の雰囲気がある。その一角に野草園がある。文化研の市民ボランティアが10年ほど前から始めたもので、木は有ったが、草は芝生のように綺麗に刈り込まれていた。そこに腐葉土を運び入れて、野草の種を蒔き、時には移植して育てている。野草園づくりで一番手間のかかるのは雑草退治だ。ここを訪れる人は増えつつあるが、野草園づくりの協力者が増えることも期待したい。春は一番花が多く福寿草から始まりショウジョ



ヒトリシズカ

ウバカマ・イチゲ・カタクリ・エンゴサク・エンレイソウ・スミレ・ヒトリシズカ・シラネアオイ・サンカヨウなどが次々と咲き、サクラソウ・クロユリと続く。野草100種類をめざしているがまだ途上にある。街の中で気軽に見られるのはありがたい事ではないだろうか。野草園にもエゾリスが出没するのも嬉しい。リスの為にクルミなどは拾わないでほしいと思っている。

3.善光寺自然公園と大木の森

この自然公園のあちこちでカタクリが咲く。カタクリの丘と墓地の辺りに群生地があり、今増えている。そこで、地元や伊達市の方々の了解の上で、カタクリの丘に保護のロープを廻した。後数年で立派なカタクリのピンクの絨毯が出来上がるだろう。福寿草やイチゲ



善光寺のカタクリ

エンレイソウの仲間です。特に美しいコジマエンレイソウもある。水色のエゾエンゴサクもチラホラと見える。東屋の近くにはフタリシズカがかたまっている。ヒトリシズカは林縁に咲く。スミレは薄桃色のヒナスミレがあるのも嬉しい。公園の管理で、一部の草刈りをやめるか・丈の低い草が残るような刈り取りができれば、野草の種類がもっと増えることだろう。そんな配慮がほしいと思う。岩の上に大木がどっしりと鎮座しているのは実は珍しいことなのだが、良く見ると低木も野草も岩の上で生きている。チセの近くの岩の上に、ヒロハヘビノボラズ(広葉蛇不登)という面白い名前の木がある。鋭いトゲが沢山あるから蛇も登れないと言うことなのだが、その黄色い花・赤い実も綺麗な。

4.北黄金貝塚「縄文の森」

市民ボランティアと行政がつくり始めた縄文の森は15年目に入った。苗から植えた木も随分と大きくなり、すでに花が咲いたり実がついたりして森らしくなってきた。散策路もつくり、野草の種まきや植え付けなども始まっている。ここで昆虫や野鳥やエゾリスまで見られるようになった。木が太く大きくなり実が増えると、もっと多くの生き物を見ることができるようになるだろう。これからが楽しみな森である。

5.アルトリ海岸の海浜植物

アルトリ海岸は自然の砂浜が美しい。伊達には、有珠以外では自然の砂浜がこんなに残されているところは無い。そういう貴重なところだ。その自然の砂浜には、ひとそろいの海浜植物がある。ハマナス・ハマヒルガオ・ハマニガナ・ハマエンドウ・ウンラン・シロヨモギ・コウボウムギ・ハマニンニクなどである。これらは砂浜の砂の移動を抑え砂浜の維持にも役立っている。

海に平行する道路から山側の丘の斜面は、また様相が違いエゾカワラナデシコ・ナミキソウ・キンギンボク・カセンソウ・キリンソウ・ノコギリソウなどを見ることができる。



カセンソウ

キンギンボクは、花が白から黄色に変化することでその名があるが、赤い実が二つ瓢箪のような面白いく低木だ。



ナデシコ

ほかにも、大臼山神社の岩上の大シナノキ・ポロノット森林公園・有珠山と紋別岳・乾町のアズキナシやハクウンボク・松ヶ枝のエゾカンゾウ群落・谷藤川・牛舎川自然公園・黄金のかたくり山などなど、伊達の自然や野草木の見所は沢山有るが、紙面も尽きたので、またの機会にしたい。

● NPO森ネットの紹介 ●

楽しく・価値ある活動を!!

- 自分にあった行事に参加が可能です。
- 自然に親しむ「観察会」を多数開催。
- 自然情報いっぱいの「会報」を発行しています。
- 森ネット「ホームページ」ではよりタイムリーで幅広い情報を掲載。
- 面白くて為になる「座学交流」もあります。
- 「自然の見所づくり」に取り組んでいます。
- 自然の「展示／講演」を行っています。
- 「樹木実践講座」「野の花写真教室」などを行います。
- 伊達などで自然を知る為の「調査」を実施中です。
- 行政などへ提言をおこないます。

会は「自然をまもる」こと・「自然をいかしたまちづくり」へ向けて、活動しています。
興味のある方はご一報ください。

(担当/木村 090-7057-3248)

E-mail: morinet@email.plala.or.jp

ホームページ: <http://www12.plala.or.jp/MoriNet/>



文化財
【保存】

蝦夷三官寺善光寺関係資料の 修復事業が生み出したもの

伊達市噴火湾文化研究所・学芸員 伊達元成

平成21年度から善光寺が所蔵する重要文化財を毎年数点ずつ5カ年に渡って修理してきました。

これらの重要文化財は、平成17年に国指定文化財となりましたが、だいぶ傷みもひどく、展示や保存に耐えられないとのことから国と伊達市の補助を受けながら修理が行われました。

善光寺は400年以上も古い歴史を持つお寺ですので、おのずと所蔵している資料もたいへん古いものばかりです。

善光寺は最も古い記録によると、天長年間（824年～833年）に慈覚大師円仁が阿弥陀仏を安置したことが始まりとされています。その後しばらく時がたって慶長18年（1613年）に松前藩の松前慶広が如来堂を再興しました。

「善光寺」と呼ばれるお寺に整備されるのは文化元年（1804年）に江戸幕府が蝦夷地に善光寺、様似に等瀨院、厚岸に国泰寺の建立を決定してからになります。

この頃の様子を記した古文書は芝増上寺に「善光寺日鑑」として保存されており、平成17年に「蝦夷地御取建並住職交代一件記」として刊行されています。

重要文化財に指定されているものは全部で69点あり、どれも長年の汚れやカビ、折れシワや破れが目立つ状態でした。このままでは展示どころか次の世代に伝えることも困難になるところでしたので、今回の修理事業では主に紙でできている掛け軸や経典を重点的に修理して、末永く保存と展示が可能な状態にしました。修理は東京の専門業者が担当し、その様子はニューズレター4号で紹介されています。（バックナンバーは研究所HPからダウンロードできます）。

さて、この修理事業は金銭的にも時間的にも規模の大きなものでした。いくら補助があるとはいえ、所有者の善光寺の負担は大きなものであったことは間違いありません。

しかし修理の過程で次々に明らかにされる美術史的、歴史的情報はこれまで「仏具」であったものから「お寺の歴史を語る資料」へと姿を変えていくことができました。

たとえば、今はすっかり茶色に見える経典の文字も、もとは鮮やかな金泥で書かれていたことや、掛け軸の裏張りに新たな文書が見つかったりしました。そして制作年代と善光寺や日本史の関係を整理することで、より立体的な歴史像として再構築できたのです。



Fig.1 修理完了した資料の返却

このような新しい情報の積み重ねが共有できたことで、檀家さんらも資料の解説をすることができるようになります。そしてこれら重要文化財を守る善光寺とその檀家さんらには、これまで以上に「我々が守らなければならない文化財である」という想いが強くなりました。併せて展示施設である宝物館も平成23年に開館しましたので、温度も湿度も理想的な環境で保存と展示を行うことができます。

文化財の保護や活用で重要なことは、守るべきものがいったい何であるかをまず理解し、適切な環境の元で管理していくことです。そして多くの皆さんにそれを住職さんや檀家さんが自分たちの言葉で紹介し、広めていくことではないでしょうか。

今回の修理事業では文化財の保存を重要視していましたが、歴史と郷土を愛するエッセンスとして文化財が機能するということを気がつかせてくれる事業でもありました。

これら重要文化財は善光寺宝物館で見学することができますので、ぜひ訪れてみてください。



有珠善光寺宝物館 北海道伊達市有珠町124

電話 0142-38-2007

※見学の前にはあらかじめ電話予約が必要です。

■伊達市民生活文化伝承者の姿

これまで伊達市では、伊達の伝統的な産業、芸術、その他市民生活文化の伝承に貢献されている方を伊達市民生活文化伝承者として認定してきました。現在まで23名が伝承者として認定されています。

ここでは、伝承者の方が活躍する姿をご紹介します。

府川 晃

きじし 木地師



昭和24年 神奈川県小田原市生まれ。
昭和41年 家業を継ぎ、木地師として技術を習得し始める。
平成3年 伊達市大滝区に工房を構える。
平成18年 国展工芸部準会員に推挙される。
伊達市民生活文化伝承者に認定される。
平成20年 伊達市迎賓館において木地師「府川晃の世界」展を行う。



府川家は代々続く「木地師（きじし）」の家系であり、氏で3代目。昭和62年に小田原から北海道に転居し、道産材の白樺や栗、朴などから作品を製作している。

Newsletter 【噴火湾文化】 第8号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所
〒052-0031 伊達市館山町21番地5
TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445
E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp
URL <http://www.funkawan.net/index.html>

●印刷 (有) 共立印刷
〒052-0022 伊達市梅本町4番地4
TEL. 0142-23-2175 FAX. 0142-25-1971

2014年3月31日発行